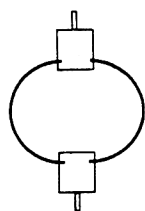


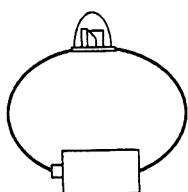
正しいんだ。」ということになる。

○モーターでモーターは回せるか？



この場合も、ほとんどの者が「回せない。」と言うのだが、実際に回ることを確認すると、「やっぱりぐるぐる説だ。」ということになる。

○発光ダイオードは、どう光る？



「ぐるぐる説」なら、向きを変えると光らないということになり、実際に光らないことを見て納得することになる。

このようにして、「ぐるぐる説はどんなときにも正しいんだ。」という一般性を獲得していった。

4 授業を振り返って

本研究では、予見型の評価を取り入れたSPDによる授業づくりを通して、概念検証型の授業を創りあげ、概念としての理解を図った。

このことが児童にどのような変容をもたらしたのか、また、どのような課題があげられるのかについて、考察してみる。

(1) 児童の主な感想から

- 自分の方法で実験できてすごく楽しかった。
- 実験のしかたを考えるのが楽しかった。
- 教科書とかに書いてある実験より、自分で実験したほうが分かりやすかった。

このように、自分たちで考え、自分たちで行った実験の結果は、児童にとって納得を持って受け入れられていることが分かる。

(2) 児童の変容

① 電気への関心の高まり

「今まで、電気についてあまり考えなかったけど、勉強をしてからいろいろ考えるようになった。」と感想を述べた児童がいる。このことは、電気への関心の高まりと見ることができる。

② 理科学習の価値の再確認

児童の中には、「理科が好きになった。」「実験の楽しさが分かった。」など理科そのものへの意識の変容が見られた。このことは、理科学習の価値を再確認できたと見ることができる。

③ 自己変容の自覚

多くの児童が、電気、あるいは理科への見方が変わったと述べている。このことは、このような自らの変容を、児童自らが自覚することができたと見ることができる。

(3) 今後の課題

- ① 評価方法の吟味
- ② 児童の理解にあった反証、確証事象の吟味
- ③ 他単元、他校種での可能性
- ④ 追跡調査の実施



〈参考文献〉

- (*)「新教育21シリーズ新しい評価法はこれだ」
松森靖夫著、平成11年、学校図書